

# 「三枚のお札」の成立

—世界の逃走譚の中で日本の逃走譚を考える—

## 剣持弘子

### 一、はじめに

「呪的逃走」と呼ばれる昔話のモティーフのうち、呪物を投げて障害物を作りながら逃げるそれは、もつともスリルに富んだ印象的なモティーフとして好まれ、世界中の昔話に取り入れられてきた。このモティーフは昔話だけでなく、神話や英雄叙事詩などにも見られる。日本では『古事記』『日本書紀』の「黄泉の国」のモティーフが知られている。

従来、この呪的逃走モティーフについての研究者の関心は、このモティーフの原郷土を探すことと分布を見極めることに、主として向けられてきたようである。<sup>(註1)</sup>昔話にしろモティーフにしろ、その原郷土を探ることは極めて難しく、本稿の目的もそこにはない。また、呪的逃走モティーフの分布は多くの研究者によって明らかにされており、このモティーフがほぼ世界中に見られることがわかってきていている。しかし、昔話においては、モティーフそのものよりもモティーフの組み合わせの方が地方的特徴を顕著に示す傾向がある。同じモティーフであっても、それが含まれる昔話はどこで

も同じではないということである。このことを踏まえ、呪的逃走モティーフを含む日本の昔話を世界的な分布の中でとらえ、それぞれの成り立ちを推定し、中でももつとも分布の厚い「三枚のお札」の成立過程を辿り、あわせて日本の逃走譚の特徴を考えてみたい。一つの国の中でも昔話の成り立ちの事情はさまざまだと思われるが、ここでその一端を示すことができれば幸いである。

### 二、日本に関連のある外国の逃走譚

呪的逃走モティーフを含む外国の昔話の詳細については、稿を改めて明らかにするつもりであるが、ここでは日本に関連のあるものに限って概観する。もつとも有名なものは、A T 3 1 3 「主人公の逃走を助ける娘」であろう。ほぼヨーロッパ全域と、その他の地域にも形を変えて分布している。この型の昔話に含まれる呪的逃走モティーフには障害物型と変身型とがあり、それを含むかはヨーロッパの中でも地域によって異なる。主人公が敵対者の娘の援助で難題を果たし、その娘といっしょに逃げるという骨組は日本の『古事記』の「根の堅州国」の場合も同じであるが、ここには呪的逃走モティ

フはない。また、現在見られる日本の昔話にはAT313に該当する話は見当たらない。

もう一つヨーロッパではAT314「馬に変えられた若者」がよく知られている。悪魔から馬といっしょに逃げる逃走場面は障害物型がほとんどである。日本では『日本昔話通観』（以下、「通観」と略称）の『昔話タイプ・インデックス』に351番「魔法の馬」として分類されている話がこれに当たる。

ヨーロッパ以外ではAT315A「人食いの妹（姉）」がユーラシア大陸東部で広い分布を見せており、人食いの妹などからの逃走場面は障害物型、木登り型、動物援助型などが組み合わされている。日本では「妹は鬼」として知られる話がこれに当たる。

その他にAT327「子供と鬼」にも逃走場面がある。327A「ヘンゼルとグレーテル」、327B「親指小僧」、327C「袋に入れられた子供」などとして知られている。ABCの区別は厳密ではない。さまざまの逃走方法が見られるが、障害物型の呪的逃走モティーフもその一つである。「子供と鬼」は世界中に分布し、日本では北海道の「黒い玉・白い玉」がこれに当たる。

### 三、呪的逃走モティーフを含む日本の昔話

#### (1) 話ごと外国から伝播した場合

孤立伝承譚として記録されている特殊な少數例を除くと、呪的逃走モティーフを含む日本の昔話には四話型ある。「妹は鬼」「魔法

の馬」「黒い玉・白い玉」そして「三枚のお札」である。

「妹は鬼」の内容は外国の話とほとんど同じである。逃走場面は外国の場合と同様、障害物型、木登り型、動物援助型などが組み合われているが、これらに、節句由来となる「菖蒲や蓬の中に隠れる」逃走方法が加わっているのは日本の場合の特徴であろう。

対馬、奄岐から九州西部、そして南西諸島へと日本の西の端に帶状に連なって、約50話の分布が確認されている。世界的な分布を見ると、前述のようにヨーロッパ以外のユーラシア大陸に分布しており、とくに朝鮮半島に多く見られる。ほかの地域にくらべて朝鮮半島の資料が手に入りやすいという事情によるのだろうが、そのことを割り引いても、日本のこの話が朝鮮半島からの伝播によるという可能性は高い。今後の調査如何では南方からの伝播の可能性も残されているが、いずれにせよ、「妹は鬼」は外国からの、基本的には波状的な伝播によつて日本の話になつたと考えていいだろう。

「魔法の馬」は『昔話タイプ・インデックス』では351番となつていて、『通観』以前、つまり『日本昔話大成』までは独立した話型として分類されておらず、また『通観』でも『昔話タイプ・インデックス』が編まれる以前の各巻では「灰坊」や「三枚のお札」などに入れられている。前半は「山姥にさらわれた男の子が、山姥の家にいた馬の助言で呪宝を持ち出し、馬といっしょに逃げる」という話である。逃走場面は障害物型呪的逃走である。後半は「灰坊」の後半と同じ展開になつていて、これは『通観』のタイプ・インデックスも示すようにAT314「馬に変えられた若者」に当たる。

る。今のところ、九州に六話見られるだけである。いくつかの要素の違いはあるが、「泣き止まぬ子を外に出すとさらわれる」という特殊な発端が一話を除いて同じであることから、伝播源は一つである可能性がある。日本近辺の外国には見られない話であり、おそらく書物などなんらかの方法でヨーロッパあたりから飛火的に伝播し、九州だけに広まつたものであろう。

「黒い玉・白い玉」は北海道だけに見られる話である。パンパンペ・ペナンベ話、つまり「上の者 下の者」として語られていることもある。「魔物につかまつた主人公が、魔物の子供たちをだまして呪宝を奪い、子供を金茹でにして逃げる」という話である。逃走場面は障害物型呪的逃走である。これは A T 327 に該当すると思われる。A T 327 「子供と鬼」は世界中に分布し、日本近辺にも見られる話なので、シベリアあたりからの波状的伝播とも考えられが、現在知られる六話のうちには採録地不明の資料も含まれており、この話の成り立ちについては検討の余地が残されている。

以上の三つの話型「妹は鬼」「魔法の馬」「黒い玉・白い玉」は伝播の道筋は違つても、国外から呪的逃走モティーフを含む話そのものを移入したケースであることは確かであろう。

#### (2) 呪的逃走モティーフだけを取り入れた場合

前節に挙げた三話型に対しても、もともと日本にあった話が障害物型呪的逃走モティーフだけをとりこんだという場合がある。その中で、「牛方山姥」「食わざ女房」「鬼婿入り」などは、もとの話が

すでに日本の話として根付いており、逃走場面もそれらの話としっかり結び付いていて、たまたま障害物型呪的逃走モティーフを受け入れたものの、それ以上広がることはなかつた。つまり、この逃走モティーフを受け入れる可能性は示したが、大勢は選択するには至らなかつたケースだと言えるだろう。

同じようにもともと日本にあった話が伝承の過程で障害物型呪的逃走モティーフを受け入れたと思われる話であつても、その逃走モティーフを含む形がすっかり定着してしまつた話がある。それが「三枚のお札」である。「三枚のお札」は A T 分類にも該当する話型はなく、ヨーロッパ以外の話型分類のされていない地域にも同じ話は見当たらないようである。もとより「三枚のお札」のような單純な構造をもつ話は各地に類似の話がないわけではないが、それはいまのところ、日本の「三枚のお札」の形成に関わりがあったとは判断しがたい。「三枚のお札」は日本で独自に形成された昔話であると思われる。

#### 四、「三枚のお札」の前身

しかし、「牛方山姥」や「食わざ女房」などのように、「三枚のお札」が障害物型呪的逃走モティーフを含まない昔話として存在した形跡はない。「三枚のお札」の場合、元の話は昔話として知られている話ではないようである。では、どのような話が元の話だったのだろうか。現在「三枚のお札」として知られている話から、呪的

逃走モティーフを取り去り、登場人物を不特定化すると、「主人公

が山中で行き暮れ一夜の宿を乞うが、鬼の家であることに気づき、「逃げ出す」という話になる。人間の原初的、普遍的ともいえるこのような恐怖の体験を語る話は、いたるところで発生し、語られていたと思われるが、必ずしも昔話として話型を形成していたわけではない。一種の妖怪譚といえるだろう。「安達が原の鬼婆」などの有名詞と結びついて伝説になっている場合もある。

このような話をさらに絞つてみると、「鬼からの脱走」という出来事になる。これは物語の核の一つではあっても、それだけでは特定の昔話の原形であるとはいえない。このような出来事を核とする話は世界中にあり、それぞれ異なる昔話となっている。例えば、日本では「牛方山姥」「食わざ女房」「鬼婿入り」のほか、「妻女奪還」「夢見小僧」「天道さん金の綱」などもそうである。これらの話と「三枚のお札」を区別するものは、「鬼からの脱走」という共通の核につらなるモティーフやエピソードなのである。「三枚のお札」を特徴づけているものは、「主人公が山中で行き暮れる」という単純な発端と、「もとの状態に戻る」という単純な結果と、それらをつなぐ「逃走場面」という単純な構成にある。そして、逃走場面が印象的な呪的逃走になつたために单なる出来事は虚構性を強め、昔話としての魅力が出てきたのであるし、その結果、話が広まつて話型を形成したのだといえるだろう。

それでは、「主人公が山中で行き暮れ一夜の宿を乞うが、鬼の家であることに気づき、「逃げ出す」という話は、実際にはどのような

話であろうか。

『昔話タイプ・インデックス』では、「鬼の家の便所」「鬼が島脱出」という話型を設定し、その中に、ほかに分類すべき話型の見当たらぬ「鬼からの脱走」を核とする雑多な話をを集めている。それらの中と、その他の資料集から該当する話をいくつか紹介する。

① 欲深な和尚がよその村まで托鉢にでかけて行き暮れる。明かりを頼りに一軒家を訪ねると、婆がもてなしてくれる。婆は寝間を見るなどいおいて、薪をとりに出刃包丁をもつて出る。和尚がこつそり寝間を見ると人骨が山のよう<sup>(注②)</sup>にあつたので、笠も袈裟も捨てて逃げる。(青森県南津軽郡常盤村)

② 旅人が正月の買い物で行き暮れ、灯りを頼りに訪ねた家で婆

にもてなされ泊まるが、夜中に目を覚まし、婆が包丁を研いでおり、人の首がころがっているのを見て逃げ出す。婆に追いつかれそうになつて、裏白の中に隠れ助かる。(鹿児島県名瀬市)

③ 魚商人が山中で行き暮れ、一軒家で糸を紡いでいる婆に泊めでもう。夜中に包丁を研ぐ音で目を覚ますと、「魚をとつて食わせる。押し込みを見るな」といつて出していく。商人は押し込みに人骨があるのを見て、逃げ出す。追つてきた婆は川を飛び越えられず、川に落ちて死ぬ。(岡山県阿哲郡神郷町)

以上のような、妖怪譚として各地に存在したであろう話があるとき、その逃走場面に障害物型呪的逃走モティーフを取り入れたと仮定するとどのような話になるだろうか。以下の話はそのような成り立ちをした可能性があると考えられる。

(1) 猫ヶ洞に旅人が迷いこみ一軒のあはら家をみつけて宿を頼み、婆にごちそうされて寝るが、目を覚ますと婆が包丁を研いでいる。旅人は逃げ出し、鬼婆が追う。旅人が土産に買つた簪、櫛、手鏡をつきつき投げると、それらは沼、山、池になり鬼婆は溺れて死ぬ。そのとき出来た山が覚王山、池が鏡ヶ池である。（名古屋市）

(2) 旅人が行き暮れて、灯りの見えた一軒の家に宿を乞うと、婆がもてなす。寝られずにいると、婆が行灯の油をなめるので、隠れようとして押し入れを開けると人骨がある。便所に行かせてくれというと、針と糸をつけられるが、もつていたお守りの一つに針をつけて逃げる。婆が呼ぶとお守りが返事をする。婆が追つてきたので「ここへ大きな山出る」「大きな川出る」といって、山と川を出して逃げる。夜が明け、鬼婆は消える。（群馬県利根郡新治村）

(3) 息子が爺に頼まれて祭の竹を取りに行き、一軒家に泊まる。包丁を研ぐ音で目を覚まし、縄をつけられて便所へ行く。縄を板に結びつけ、婆にもらってきた柏葉を振つて、へら、川、砂山、海、とげの山を出して逃げる。鬼婆はあきらめる。息子は竹をとって帰る。（山形県上山市中生居）

## 五、「三枚のお札」の成立

以上のような話が「主人公＝小僧・呪物＝お札・援助者＝和尚」

という組合せをもつ「三枚のお札」に発展したのだと推察することはできても、どの話も自然にそうなつたとは考えられない。明らかに人為的な語り変えがあつたと推測される。

現在の「三枚のお札」の特徴である「小僧・お札・和尚」の組合せがどのようにして出現したかに関しては、水沢謙一が、「『三枚のお札』に和尚が登場するのは、和尚が語り手であつたためで、本話が一度は仏教の管理下にあつたものと思われる。・・・なお、寺の坊さんから本話を聞いたという人も、わずかな例だつたがあつた」といっている。この場合は残念ながら、語り手の具体的な情報は明らかにされていない。しかし、寺で説教の前に昔話を語つたといふ事実は各地で明らかにされており、それらの昔話の中に「三枚のお札」も含まれていた記録はある。寺が「三枚のお札」の語り替えに関与したところまでは突き止められないにしても、「小僧・お札・和尚」の組合せをもつ「三枚のお札」の異様なほどの大さと、寺で採録された昔話の中に「三枚のお札」があるという事実から、「三枚のお札」と仏教のかなり密接な関係を推測することはできよう。

「三枚のお札」が仏教の布教に利用されたかどうか、そして、その効果があつたかどうかはともかく、少なくとも、この話の主要な要素が「小僧・お札・和尚」という組合せになつたことは、「三枚のお札」が昔話として定着し、広まることに大きな力があつたようと思われる。このことについては七章で考察する。

「三枚のお札」の分布の広がりは北日本一帯に及ぶが、とりわけ

新潟県での分布の厚さは特筆すべきものがある。水沢謙一の集中的な調査という特殊性のせいだけではないだろう。一旦「小僧・お札・和尚」の組合せをもつ昔話として成立した「三枚のお札」の原形が、その後さまざまな付加モティーフや付加工エピソードによって成長したのが現在の姿であると考えられる。それらの付加工エピソードのすべては新潟県で見られるが、このことから「小僧・お札・和尚」の組合せが新潟県で成立し、その後他の地方に伝播したと推測することもできる。また、秋田県での分布が「鬼を一口」エピソードをもつ話に偏っており、新潟県に比べて歌、唱えごとなどで豊かなようになった話が多いという事実もその推測を裏つける判断材料の一つとなろうが、今のところ断定は控える。

## 六、「三枚のお札」の原形と付加工エピソード

ここで原形というものは、「話の起源という意味ではなく、一つの話のさまざまな類話の元であるという意味において重要な形」であるという、地理歴史学派の先駆者、ロバーツの考えに沿うものである。従つて、前述の妖怪譚が起源であるとすれば、ここでいう原形とは、その妖怪譚が呪的逃走譚に成長し、その後「小僧・お札・和尚」の組合せが定着した「三枚のお札」の、さらにさまざま付加工エピソードによつていくつかの類話を形成する直前の形であるということになる。

分布図の凡例を兼ねて、原形と付加工エピソードの関係を階段式に

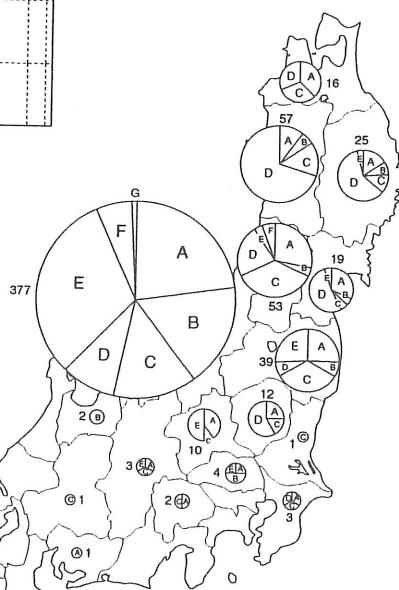
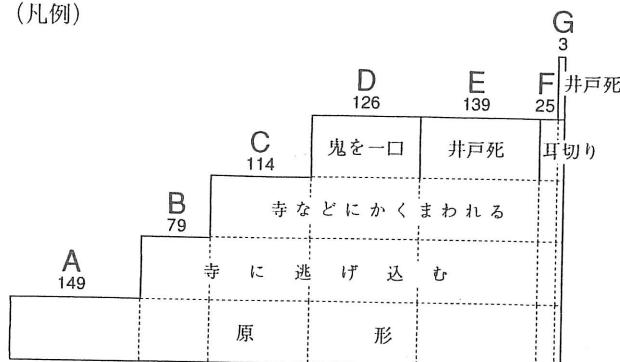
示した。一番下の段が付加工エピソードのつかない原形と考えられる話である。左端に飛び出しているAの一四九話は原形のままであることを示し、Bは原形に寺に逃げ込むというエピソードだけがついた話で七九話あることを示している。さらに寺の中のどこかに匿われるエピソードだけがついた一一四話がCである。この上に「鬼を一口」と「井戸死」と「耳切り」というエピソードが並立していく、それぞれの付加モティーフをもつ話がD、E、Fとなり、一二五話、一三九話一二五話あることを示している。「鬼を一口」というのは、寺の和尚が鬼に化けくらべを挑んで、鬼が豆粒ほどのなったところを食べてしまうというもので、「長靴をはいた猫」でよく知られるエピソードである。「井戸死」というのは井戸に映った影を見て小僧だと勘違いして、鬼が井戸に飛び込んで死ぬというもので、「牛方山姥」など他の話にも見られる。「耳切り」というのは和尚が小僧の体にお経を書いて仏像に見せかけると、書き忘れた耳だけを鬼が切り取つて行くというもので「耳なし芳」でも知られている。「耳切り」の上にさらに「井戸死」エピソードがつくのも三例ありGとしてある。口承文芸である昔話が付加工エピソードによって膨らむ場合、その付加工エピソードは語り手の創作であるよりは他からの借用であることが多いが、「三枚のお札」の場合も例外ではないことがわかる。

D、E、Fなどに分かれる前の、階段の二段目と三段目つまり「寺に逃げ込んで匿われる」というエピソードについては従来あまり注意が払われてこなかつたが、これもやはり、原形を膨らませる

# 「三枚のお札」分布図

総話数 635

(凡例)



付加工エピソードの一つであり、このエピソードがついた話にさらに異なるエピソードがついて複数の類話を形成しているのだと考へる。このエピソードが、東北地方一帯に流布していたと見られる伝説または説経節「山椒太夫」の中のエピソードから影響を受けた可能性があると思われるからである。

説経節「山椒太夫」の中では、寺に逃げ込んだ厨子王は皮籠に入れられ垂木に吊される。その下で聖がなにくわぬ顔で読経しているところへ追っ手が来て怪しみ、皮籠を開けると、御守りの地蔵菩薩が金色の光を放ち、追っ手は目を見つぶされる。<sup>(注1)</sup> 説経節だけでなく伝説の中にもこのエピソードは見られる。そして、「三枚のお札」でも、寺に逃げ込んだ小僧が葛籠などに入れられ、天井から吊してもらうという場合が多く、さらに、

鬼婆が怪しんで開けると、地蔵などに見えて、目がくらむという話に進む場合も少なくない。吊されないまでも、経箱や押し入れに匿われるのは簡略化された形であると考えられる。寺の小僧が寺に逃げ込むのはいかにも自然な行為ではあるが、諸外国の逃走モティーフの例から、追っ手は障害物に阻まれて諦めるか死ぬという結末が本來的であろうと思われることも考え併せて、「障害物のおかげで逃げおおせる」という場合と、「寺に逃げ込む」という場合にはいくらかの時差があると判断する。原形は以下に示す。

- 1、小僧が和尚からお札をもらって、山へ花などを採りに行く。
- 2、小僧は山で行き暮れ、灯りを頼りに一軒家で一夜の宿を乞うと、婆が泊めてくれる。
- 3、小僧が婆の正体は鬼婆であると気づき、便所に行かせてくれれない。詳しい検討は別の機会に回したい。

頼むと、婆は小僧に縄をつけて便所にやる。小僧は縄をほどいて逃げ出す。

4、婆が追いつきそうになると、小僧はお札を一枚ずつ後ろに投げ、山、川、火などを出して逃げ、助かる。

この原形にさまざまな付加モティーフや付加工エピソードがついて話が膨らみ、いくつかの異なる類話が形成されることになったことは、前述の通りである。<sup>(注2)</sup> その結果、関敬吾がいうように「内容は童話化した」といえるだろう。

## 七、日本の逃走譚の特徴——まとめ

以上述べてきたように、呪的逃走モティーフを含む日本の昔話四話型はそれぞれ成り立ちが異なることが明らかになった。すなわち「妹は鬼」「魔法の馬」「黒い玉・白い玉」の三話型は伝播の道筋は同じではないが、いずれも国外からの伝播によつてもたらされたものであり、「三枚のお札」は日本で独自に話型が形成されたものであるということである。しかし、「三枚のお札」において呪物がお札になる前の呪的逃走モティーフそのものがどこからきたのか、つまり『古事記』からつながっているモティーフなのか、新しく外國から移入されたものなのかという問題は残されている。投げられる呪物や作られる障害物などの要素から見ると、『古事記』よりも外国の影響の方が強いようと思われるが、簡単に断じることはできない。

ところで、呪物が三枚のお札になつたことで、呪物のもつ意味が、外国の場合だけでなく、先の三話型、つまり、話そのものを外国から移入したと思われる「妹は鬼」「魔法の馬」「黒い玉・白い玉」とも異なってきたといえないだろうか。このことが、この三話型にくらべて、「三枚のお札」が広範囲での厚い分布をもつようになつた原因の一つかと思うのである。

例えば、ヨーロッパの「馬に変えられた若者」の場合、主人公が馬といつしょに悪魔から逃げると同時に使う呪物は、悪魔から奪つたものであることが多い。この場合、呪物は悪魔のものであるといえるだろう。そして魔法あるいは呪力は呪物そのものにあって、だれが使っても力を發揮すると思われる。これは、この話の日本版である「魔法の馬」の場合にもいえることである。魔法がだれに属するかについてはさまざまなケースがあり、それぞれ語り手や民族の魔法についての意識を伺わせて興味深い。「三枚のお札」の場合、呪物がお札になり神仏の手のものとなつたことで、呪物による奇跡はヨーロッパ的な魔法ではなく、神仏の靈験となつた。ただの紙切れ或いは木切れに、祈るということによって力が与えられ、呪物となり、その呪物は神仏の加護を受けた者だけに靈験を頼るのである。日本人にとって神仏の靈験はわかりやすく馴染み深い奇跡である。

さらに、呪物が単純化してお札一種類になつたために、話の運びにスピード感が増し、スリルも増幅された。

〔注〕  
ところで、本稿では副題として、便宜的に逃走譚という言葉を使つた。「三枚のお札」のような、逃走場面そのものが中心となつてい

る話は逃走譚といつてもいいだろう。そして、そのような単純な話が好まれるというのも日本の場合の特徴といえるかも知れない。それで対してヨーロッパをはじめとする外国の呪的逃走モティーフを含む話はかならずしも逃走譚とはいえない。呪的逃走モティーフは長い話の一部分に過ぎず、このモティーフがなくても、話型の特定はできるからである。実際に語られてきた話にはこのモティーフのない場合も多い。

外国から話そのものを移入したと思われる三話型のうち、「魔法の馬」と「黒い玉・白い玉」が日本であまり広まらなかつたこと、そして「妹は鬼」はかなり広まつたにしても、障害物型呪的逃走よりも、節句由来となる「菖蒲や蓬に隠れる」逃走の方が多くなつていることは、この三話型が日本の昔話になりきるには少々違和感があり、また、障害物型の呪的逃走モティーフはそのままでは馴染みにくかつたことを示しているように思われる。それに對して「三枚のお札」は、ヨーロッパ的な魔法が日本的な神仏の靈験となり、日本人に馴染みやすい昔話となつたからこそ、その後の優れた語り手たちも、さらに豊かに話を膨らませ、子供にも喜ばれる話に育ててきただろうか。

分析に使用した資料は『通観』（『日本昔話通観』同朋舎出版一九七七／一九九三）全三〇巻と、『通観』未収録の四八点である。紙面の都合上詳細は割愛させていただく。

- ① (Antti Aarne: Die magische Flucht. Eine Märchenstudie. FF COMMUNICATIONS No. 92. Helsinki 1930.) (閻昭文子訳によく)
- 大林太良『日本神話の起源』九二〇頁、徳間書店、一九九一年  
他
- ② 『通観』第一卷三四四頁。原話・鈴木政四郎『津軽むがし集』三九頁、郷土考古学研究同志会一九五一年
- ③ 田畠英勝『全国昔話資料集成一五・奄美大島昔話集』一一三頁、岩崎美術社一九七五年
- ④ 『通観』第一九卷三六〇頁。原話・岡山県稿三一、岡山民話の会一九六一
- ⑤ 『通観』第一三卷三五一頁。原話・毎日新聞社学芸部編『東海の民語』一二四頁、六法出版一九七五年
- ⑥ 『通観』第八卷一六頁。原話・上野勇『全国昔話資料集成一三・利根昔話集』一〇〇頁、岩崎美術社一九七五年
- ⑦ 『通観』第六卷四四頁。原話・萩生田憲夫『小僧・子と鬼婆』一一五〇頁、上山市郷土史研究会一九六五年
- ⑧ 水沢謙『黒い玉・青い玉・赤い玉—越後の三枚の札』七〇三頁、野島出版一九七三年。
- ⑨ 例えは、長岡市の永法寺で筆者が直接お話を伺ったところでは、お寺で昔話が語られたことはわかつたが、その中に「三枚のお札」があつたことは確認できなかつた。新潟県出身の現代の語り手古市静子氏の報告では、氏の知友で「三枚のお札」を聞いたことのあら人は多いが、伝承源はいずれも祖父母までしか溯源しないとはやらず、お寺で聞いたという事実は確認できなかつた。しかし、佐々木達司氏が津軽の木造町の洪福寺で採録された話の中には「三枚のお札」が含まれている。同氏編『津軽西北のむがし』文芸出版一九七八年(復刻版)。同氏の示唆による。
- ⑩ (Warren E. Roberts: The tale of kind and unkind girls. Fabula-Journal of folktale studies, Walter de Gruyter & co., Berlin 1953) (田中浩子訳による)
- ⑪ 酒田伸行『山椒太夫伝説の研究』名著出版一九九一年
- ⑫ 『閻敬吾著作集6・比較研究序説』一七二頁、同朋舎出版一九八一年
- ⑬ 『日本昔話集成』で閻敬吾は初めて逃竄譚という名称を話型群名として使つてゐる。本稿ではより平易な逃走譚といふ言葉を同じ意味で使つた。
- 付記 本稿は平成七年度日本口承文化学会大会で発表した草稿をもとに加筆修正したものである。  
(けんもぢ・ひらい／昔話研究 土曜会)